

ゆりかもめ

yurikamome



ゆりかもめ発刊に寄せて 敦賀市 文化交流部長 織田 一宏

敦賀市では今年度より文化交流部を新設しました。この文化交流部では、文化・スポーツ関連事務を教育委員会から移管し、国内外の交流事務と併せて担当することになります。これにより、本市の有する柴田氏庭園や水戸烈士記念館を始めとする歴史的・文化的資産やスポーツ資源をこれまで以上に保存・活用するとともに、友好都市、観光交流都市や人道の港をはじめとする国内外との各種交流事業を一体的に推進すること、更なる交流人口の拡大を目指します。

また、ゆりかもめの今回の特集でも取り上げられています松尾芭蕉についても、敦賀が「おくのほそ道の杖置きの地」として歴史的・文化的資産でもあり、この情報を発信すべく、俳句のワークショップ開催や全国俳句大会投句募集など様々な取り組みをこれまでも行っており、今年度も継続して開催される予定です。さらに、敦賀市立博物館では、松尾芭蕉に関するミニコーナーを設けて芭蕉所用と伝わる竹杖などを展示する予定です。こうした様々な取り組みが、市民の皆様には私たちの敦賀にはこんな文化財があるんだと知っていただくきっかけになり、更には敦賀に来られた観光客の皆さまにも知っていただくきっかけになれば幸いです。

新幹線が敦賀開業して1年が経過し、これから敦賀を一層盛り上げてまいりたいと考えておりますので、引き続き、温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



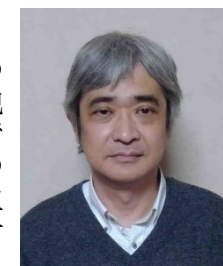
新入会員のごあいさつ

伊藤 行夫

はじめまして伊藤行夫と申します。私は越前の武生で生まれ、現在は敦賀に暮らしております。気がつけば、この地での生活も40年を超えました。

昨年、『大河ドラマ『光る君へ』の関連イベントに参加し、紫式部の父・藤原為時が越前国府に赴任する場面「在庁官人」役を務める機会をいただきました。その際、私は越前国（現在の福井県嶺北地方を中心とした地域で、敦賀も含まれます）の魅力を紹介するセリフを自ら担当したのですが、その中でこの地を「豊かな自然の恵みと、伝統的な手仕事が続く、まさに『良いところ』」と紹介しました。敦賀には、古代から近代に至るまで、他に誇れる数多くの歴史的資源があります。これらのコンテンツを他地域の歴史や文化と関連付け、さらに時代を超えて紐解くことで、敦賀の物語はより深みを持ち、多くの方に親しみを抱いていただけると確信しています。

しかしながら、こうした敦賀の歴史的魅力が、まだ十分に活かされていないと感じています。以前参加した『歴史観光フォーラム』でも、同様の意見が交わされていました。だからこそ私は、この貴重な地域資源の魅力を、より多くの方々に伝え、共にその価値を深めていけたらと願っております。



INFORMATIONs

☆敦賀市立博物館

○ コレクション展 「おくのほそ道」と敦賀 令和7年8月27日（水）～10月13日（月・祝）
松尾芭蕉所用と伝わる竹杖や、蕉翁宿関係資料が紹介されます。

○ コレクション展 天狗党資料展 令和7年8月27日（水）～10月13日（月・祝）
元治元（1864）年12月、水戸天狗党は尊王攘夷の旗のもと、水戸から行軍し、敦賀の新保村で討軍の加賀藩に降伏、市内の寺院に収容されました。翌年、幕府役人により浜辺に建ち並んでいた荷蔵に監禁された後、350人以上が処刑されます。
令和6年（2024）10月、天狗党が実際に監禁されていた荷蔵が、史跡「武田耕雲斎等墓」（敦賀市松島町）の境内に移築され、近くには歴史ガイダンス施設が建てられました。これを記念し、本館3階で小テーマ展示が行われます。

ガイドの依頼・問合せ

ガイドの依頼及び問合せは、敦賀観光協会にて受付けています。申込み用紙は、下記のアドレス内の「団体向け観光ガイド」から申込書をダウンロードし、必要事項を記入いただいた後、敦賀観光協会宛てにお送り下さい。

港都つるが観光協会 TEL 0770-22-8167
FAX 0770-22-8197
URL <https://tsuruga-kanko.jp/>

ガイドメンバー募集中

観光ボランティアガイドつるがは、随時メンバーを募集しています。敦賀のことをもっと知りたい方、観光に来られた方に紹介したい方、人と接するのが好きな方、入会に制限はありません。下記の連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

ボランティアガイドつるが TEL 0770-21-0056
港都つるが観光協会 TEL 0770-22-8167

編集後記

今回は、「つるがバショさん会」と連携した特集号です。昨年、新幹線敦賀開業の特集号を発行した時に、敦賀市内の街歩きマップを挟み込みましたが、バショさん会の方から芭蕉のゆかりの地を巡るマップも作成したいとの連絡がありました。今回、市内の芭蕉ゆかりの地を巡るマップを一緒に作成し、全体行程も紹介した特集号としました。

私たちは、敦賀が「おくのほそ道 杖置きの地」として、観光客の皆さんにご説明し、そして、「むすびの地」が大垣であることも紹介しています。大垣市の「むすびの地記念館」では、「おくのほそ道」の全体の行程を紹介するビデオが放映されておりそれを観ていると、全体を巡っている気分になります。当時46歳の芭蕉、2400キロにも及ぶ道を歩くという現代人には想像もできないような旅です。山刀伐峠、立石寺、最上川舟下りなど出かけたところは沢山あります。猛暑の時期は避けて皆さんもいかがですか？（将）

敦賀のみどころ⑭ おくのほそ道 杖措きの地 敦賀

文学作品「おくのほそ道」では、「中秋の名月を敦賀のみなとで」と楽しみにしている。芭蕉はどのような名所旧跡・歌枕の地を巡り、敦賀に到着したのだろう。素龍清書本（敦賀市西村氏所蔵・国重要文化財）の複製本（敦賀市教育委員会刊行）をもとにだいたいを辿ってみよう。

「おくのほそ道」の旅が今年であったなら、ゆりかもめ52号発行日の7月11日、芭蕉は危険な山刀伐峠（山形県）を越えている！敦賀到着まで、まだあと86日間！

（松村 由利子）

3月 約五か月間、2400kmにも及ぶ東北・北陸地方への旅のスタートは、元禄2年3月27日（新暦1689年5月16日）の朝。芭蕉は、舟で深川（東京都）から千住（東京都）に上り、多くの親しい人たちに見送られて、門人曾良とともに旅立った。歩き続け草加（埼玉県）で一泊。翌日、室の八島明神（栃木県）に参詣。曾良は、祭神「木の花咲耶姫」の出産にまつわる言い伝え等を解説した。

いよいよ、風雅を愛する文人達が心を寄せた念願の史跡「白河の関」（福島県）到着。卯の花に白い茨の花が咲き添う非常に気品溢れる関所であった。さらに須賀川で四、五日滞在し、俳席で連句三巻。清貧を営む僧に出会う。浅香の沼の花が、つみを尋ね歩く。

4月 日光山（栃木県）参拝。尊さに感嘆！「裏見の滝」にこもって心身の穢れを払う。那須の黒羽で2週間程滞在。俳人兄弟から歓迎のもてなし。雲巖寺参詣。禅の師仏頂和尚の庵訪問。湯本温泉で、美女妖狐が射殺され石になった

5月 しのぶもじ摺りの石（福島県）見物後、武士道の鑑佐藤氏の旧跡を訪ね感涙。飯塚温泉に泊まるも持病で体調を崩す。笠島（宮城県）を通り、岩沼で武隈の松に会う。五月端午の節句日に仙台入り。千年前の壺の碑を目に旅の疲れも吹き飛ばす。陸奥国一之宮塩竈神社参拝。

太平洋側の二大名所訪問。何よりも心にかかっていた松島の月の夜景と、神の仕業と感謝。

じる大自然の風光明媚な絶景に大絶句！代わりに曾良が句詠。瑞巖寺参詣、石巻を経て、ついに、今回の旅の最大目的地平泉（岩手県）に到達。金鶏山・高館・中尊寺経堂光堂へと、義経主従や藤原氏三代の栄耀大悲劇地を巡り、時のたつのも忘れて涙にくれた。その後尿前の関を通り、屈強な案内人を先頭に恐ろしい山刀伐峠越えを果たし、尾花沢着。豪商清風宅は居心地よく、句会を楽しむ。出立後、実に清らかで静かな佇まいの立石寺に参詣。不朽の名句が生まれた。

次の大石田では、頼まれて俳諧の指導をしている。

6月 圧倒的な陸奥の自然の力強さに驚く芭蕉がいる。五月雨で増水の危険な激流最上川（山形県）を下った。霊山出羽三山参拝。羽黒山では会覚阿闍梨に拝謁。俳諧興業。羽黒権現参拝。月山では頂上で一夜を明かす。湯殿山の後、三山巡礼の句を短冊に書く。鶴岡の城下町に入り連句一卷。川船で酒田（山形県）の港に下り句会。日本海側の名勝で待望の歌枕の地・象潟（秋田県）に到着。雨の象潟にも、舟を浮かべての朝日輝く象潟にも、すっかり魂を奪われた！酒田から越後路南下

一笑の死を知り、追善供養の句会開催。小松の多太神社に参拝し、齋藤実盛の甲などを見る。様々な奇岩のそそりたつ那古寺参詣後、効能抜群の山中温泉に入浴。なんとこの温泉地で八泊！

8月 曾良と別れ、金沢から同行の門人北枝と全昌寺（石川県）に。吉崎の入江を船で渡り汐越の松を見る。天竜寺で北枝と別れ、永平寺参詣。福井で旧知の等裁の家を探し当て、意気投合し二泊。八月十五夜の中秋の名月は敦賀のみなとでと、等裁とともに出発。

その日の美しい月夜に、宿の主人の勧めで氣比神宮参拝。遊行上人の故事を聞く。15日は雨で名月は見られず！16日秋晴れ！回船問屋天屋五郎右衛門（俳号玄流）の厚いもてなしで、色の浜（この旅で西行歌枕最後の地）に遊んだ。この年は、西行の500回忌にあたる。この浜でゆっくり風雅に溢れるひと時を過ごし本隆寺に一泊。その日の事

その後、出迎えの露通と「結びの地」大垣（岐阜県）へ行く。多くの親しい人から旅の無事を喜び迎えられた。それから、9月6日（新暦1689年10月18日）になると、また舟に乗り伊勢へと旅立つのである。こうして、「おくのほそ道」は幕を閉じる。

氣比神宮境内の芭蕉像（敦賀市）



おくのほそ道むすびの地 記念館前の芭蕉像（大垣）



採茶庵を出発する芭蕉像（東京江東区深川）

7月 日本海の荒海と断崖絶壁に挟まれた交通の難所、「親知らず・子知らず」（新潟県）を越え、市振に着くまでは、暑さや雨での疲労困憊と持病で記録もつけなかった。「荒海や：」の句はこの七夕の頃の絶唱である。市振の関では、伊勢参宮の遊女と泊まり合わせ、同道を頼まれるも断っている。黒部川を渡って那古（富山県）に出た。その先の担籠の藤波見物断念。卯の花山・俱利伽羅峠を越え金沢（石川県）へ。ここ

その日の美しい月夜に、宿の主人の勧めで氣比神宮参拝。遊行上人の故事を聞く。15日は雨で名月は見られず！16日秋晴れ！回船問屋天屋五郎右衛門（俳号玄流）の厚いもてなしで、色の浜（この旅で西行歌枕最後の地）に遊んだ。この年は、西行の500回忌にあたる。この浜でゆっくり風雅に溢れるひと時を過ごし本隆寺に一泊。その日の事



ところで、2025年の中秋の名月は10月6日。皆さんも芭蕉と同じように、前日5日夜氣比神宮にのぼる月（日本百名月に認定）を楽しませてはいかがでしょう。是非どうぞ！

つるがバシヨさんと作成した「街歩きマップ」を参考にお楽しみください。松尾芭蕉の敦賀滞在について、詳細は、当方発行「みなと・つるが・いまむかし」（市内各所に配置済み）をご覧ください。（参考：敦賀市立博物館発行『おくのほそ道』330年の旅）

JR敦賀駅周辺

『芭蕉 おくのほそ道：敦賀の旅』

～ 名月はつるがの湊にと旅立つ ～ (「おくのほそ道」より)

松尾芭蕉は、元禄2年8月14日
(仲秋の名月の前夜) 敦賀に到着。
その後の芭蕉の足跡を辿るコースです。

①JR敦賀駅 3番バス乗り場 (地図右下) ㊚

▼ぐるっと敦賀周遊バス 乗車 約3分
▼ " 氣比神宮 下車

▼徒歩 約2分

②氣比神宮 (45分) ㊚

▼徒歩 約5分

③西方寺跡地 (5分)

▼徒歩 約5分

④出雲屋跡 (5分)

▼徒歩 約5分

⑤天屋玄流旧居跡 (5分)

▼ぐるっと敦賀周遊バス 博物館通り 乗車 約5分
▼ " 金崎宮 下車

▼徒歩 約1分

⑥金前寺、金崎宮 (45分) ㊚

▼ぐるっと敦賀周遊バス 金崎宮 乗車 約10分

⑦JR敦賀駅 3番バス降り場 下車 (地図右下) ㊚

②氣比神宮



芭蕉は、敦賀に到着したその夜、逗留した出雲屋の主から「北国日和は定めなし、今夜のうちに・・・」と勧められ、氣比神宮に夜参りしています。

ここで詠まれた句

「月清し遊行のもてる砂の上」は、鎌倉時代の時宗高僧の故事と境内の風情が重なったものです。また、初句が「なみだしくや 遊行のもてる 砂の露」であり、その後推敲を重ねていることも興味深いことです。

氣比神宮の境内には、芭蕉の像と句碑が、大鳥居の向かいには「お砂持ち」の行事にちなんだ像があります。



⑥金前寺、金崎宮

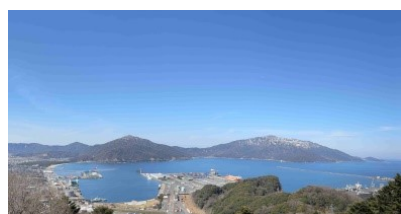
芭蕉は、8月15日、雨にたたられたことから、金前寺で過ごします。南北朝時代の金ヶ崎「沈鐘伝説」を聞いて詠んだ句碑が残されています。



県内に残っている芭蕉の句碑としては最も古いものです。



金崎宮は、様々な歴史の舞台となった金ヶ崎城址の麓にあります。この付近からは、芭蕉が渡った色が浜などの敦賀湾が一望できます。



⑤天屋玄流旧居跡

芭蕉は、8月16日、敦賀俳壇で活躍していた天屋五郎右衛門(俳号は玄流、回船問屋)の仕立てた小舟に乗り、西行法師も訪ねた色が浜に渡りました。



④出雲屋跡

出雲屋は、芭蕉が敦賀で逗留した宿です。敦賀を去るにあたって、出雲屋主人の厚意に報いるため、笠と竹の杖(市文化財指定・市立博物館蔵)を残しました。

敦賀が、「おくのほそ道 杖措きの地」と言われるゆえんです。



③西方寺跡

「遊行のお砂持ち」の行事に関連する時宗の寺の跡地。「おくのほそ道 素龍清書本」の碑があります。



START & GOAL

① J R 敦賀駅西口、3番バス乗り場
ぐるっと敦賀周遊バスを利用

乗車券：200円
一日フリー券：500円



『芭蕉 おくのほそ道：敦賀の旅（郊外編）』

色ヶ浜（本隆寺）

芭蕉は、雨の中秋名月の翌日（8月16日）、天屋玄流の用意した舟で、歌枕の地、色ヶ浜を訪ねました。

敬愛する西行法師の詠んだ「汐そむる ますほの小貝拾ふとて 種の濱とはいふにやあるらむ」に因み、ますほの小貝を拾い盃に浮かべるなど、西行を偲び風雅にすごしました。

～ 茶を飲、酒をあたゝめて ～というつろいだ一節は、「おくのほそ道」の文中で他に例がありません。

なお、この浜で得た印象を、～ 夕ぐれのさびしさ感到堪たり ～と記しています。このあらましを、同行の等載に書かせ、本隆寺に残しました。（後に「松尾芭蕉色ヶ浜遊記」と名づけられ、現在は、市立博物館蔵、市指定文化財。）

西村家：「おくのほそ道素龍清書本」所蔵

長旅を終えた5年後、芭蕉は「おくのほそ道」として一冊の本にまとめました。書家の素龍が清書し、表題を「おくのほそ道」と自らが筆をとり、常に持ち歩いていましたが、この年の10月（1694年）旅先の大坂で亡くなりました（51歳）。本は、兄に渡り、その後、幾人もの人を経て、白崎琴路から西村野鶴（共に江戸時代の俳人）に譲られました。現在も西村家で大切に保管され、「おくのほそ道素龍清書本」として、国の重要文化財に指定されています。西村家には、江戸初期作の名園があり、「松風の落葉か水の音すゝし はせを」の句碑があります。現在、家屋、名園いずれも公開されていません。

